1号(1977.2)

創刊のことば

会長　大護八郎

カメラを肩に野道を歩いていると、突然目の前にすばらしい石仏が現われることがある。思わずフッとため息をついて、どっかと草むらに腰をおろす。さてこれをどのように料理してやろうか、やがて立ったりしゃがんだりしてあれこれとカメラアングルを考える。そんなとき誰かといっしょなら、お互いににっこりうなづき合ってお互いの感動を確め合う。一人のときは、自分の顔が自然にほころんでいるのがよく分る。けれども何かひとり占めにするのは惜しい。誰かにそれを分ちたい。こんな経験は石仏行脚を続けている人なら、誰でも何回かお持ちのことと思う。

石仏に心を向けている人と会うと、先づ出てくる言葉は、この間どこそこでこんなすばらしい石仏に出合った。姿のよさは勿論だが、その背景がまた何ともうまく石仏とマッチしている。今度是非写真をお目にかけたい。言葉の端々にその感動が躍っている。

こんな経験をお互いに続けているうちに、ひとつ全国的に石仏の会を結成したいものだ。そして誌上を通じて、あるいは調査の行を共にし、あるいは座談会を開いて、お互いの情報を交換し、問題点について意見を交換し合ったらどんなにすばらしかろうという話がここ数年、何回となくいろいろの人々と交わされた。

しかし会を結成するからには、発会間もなく解散といった人騒がせなことでは勿論申しわけないし、やはり石仏の会という性格上、ばっしりと写真を豊富に使った機関誌がどうしても必要である。立派な活版印刷でしかも百頁ぐらいのものは欲しいとなると、それ相応の資金も必要であり、一千名ぐらいの会員がなければ成り立たない。そう思うとはやる心をおさえて周到の準備をし、機の熟するのを待たねばならなかった。

ここにたまたま日本で一番多く石仏関係の図書を出版している木耳社の田中社長さんと編集の島亨さんの肝入りで、機関誌の発行その他の会の事業に全面的バックアップを引き受けてくださることになった。早速長い間石仏を通じてお付合いのあった遠くは九州や広島から、関東各県の研究家に呼びかけたところ、好機到来とばかり集まってくだされ、昨年九月に一応の出発の準備は完了し、五十二年一月をもって正式発足とし、ここに機関誌「日本の石仏」の創刊の運びとなったわけである。創刊号のこととて広く会員各位に呼びかけることもできず、とりあえず発起人が分担執筆ということになったが、二号からはいうまでもなく会員の玉稿に総べて期待する次第である。当分は年四回の季刊とし、概ね百頁前後とし、なお会員頒布以外にも一千部程を全国の書店を通じて市販することになった。

石仏に志向する人々は現在でも相当数にのぼり、その数は逐年増大の一途をたどりつつあることはまことにご同慶の至りであるが、その向きはまたさまざまであるということができる。この機関誌がそれぞれの志向を総べて充足するように編集されなければならないことは勿論である。

野道を歩くことを楽しみとし、雑草に埋もれたようにある石仏があればなお良し、あるいは石仏の所在から忘れられた古道を復元しようとする人々にとっても、路傍に佇立する風情ある石仏の写真は楽しみであろうし、各地の様々の石仏を撮りためて、アルバムの増えていくのを喜びとする人々をはじめとして、総べての人々に写真紹介が最も必要であることはいうまでもないことである。将来は口絵にグラビヤの数頁を設定して楽しんでもらいたいと考えているが、とりあえずは各原稿にそれぞれ四〜五枚の写真を入れていく予定で、写真には大いに力を入れていくべきものと思っている。なお学術的な資料としては実測図や模写で写真で表現しきれない点をカバーし、銘文なども重要なものは拓本によるべきものと

考えている。殊に数多い石仏の中には、（石神の場合が特に多いが）それが何神、何仏であるか判断に苦しむ場合にしばしば出合うことがあるが、その像容を正確に表現し、会員各位の協力によって類似の事例と併せれば、次々と解明できるものである。

さらに旧鹿児島藩領を中心に南九州にしか見られないとする田の神像、あるいは福島県の一部にしか無いとされる淡島様の垂髪の女神像にしたところで、全国的に会員の力によってその実態を明らかにすることも容易である。あるいは双体道祖神の分布圏と地方的特性のごときも、個人の力をもってしては解明困難である。

石仏の中には農民自らの手によって彫像されたと見られるものがあるにしても、大方は地方の石工の造像であろう。しかしそこには地方地方の農民感情や農民の美意識を象徴した、いわゆる農民芸術として見ることも可能であり、こうした視点からの分野の系統的な開拓も必要であろう。

磨崖仏や独立石仏のような古仏も勿論この会の対象であるが、より多く民間信仰との関連の濃い近世以降の石神・石仏を手がけている人々が多い。石神・石仏としては道祖神であり庚申塔であり馬頭観音であり、さらには地蔵や観音であっても、それを受けとめた地方地方の信仰は実にさまざまであって、これこそ日本全国にわたる会員の力によってはじめて実態を明らかにすることができるものである。

遠隔の地にまで折をみては足を運ぶ人々がすくなくないが、いずれ到る処において会員相互が、個人的にも交歓の機会を深めることであろう。

機関誌「日本の石仏」が本当に「日本の石仏」となる日の早からんことを祈って創刊のごあいさつにかえたい。

2号（1977.6）

巻頭言

会長　大護八郎

日本石仏協会がこの一月に正式発足をしたといっても、創刊号「日本の石仏」が出たのは三月に入ってからであり、また実際に会則等がこれぞと思う人々に配布されたのも二月下旬であった。以後、僅々二か月余の間に会員は五〇〇名を突破した。このことは発起人一同にとってまことに大きな驚きであった。いずれにしても発会二年には一〇〇〇名の会員になることがわれわれの期待であったが、発会早々こんなに急速に会員がふえるとは思っていなかった。

このことはわれわれが自画自讃にうつつを抜かしてよいということではない。こうした会の発足が、こうした写真を多くとり入れたがっちりした機関誌が、江湖の人々に渇望されていたことを裏書きするものである。それだけにわれわれの責任の重大さを、ひしひしとこの身に感ずる。人々の、この会に対する期待がはずれたときには、この急速な盛り上りに倍する勢いで退潮していくであろうことも目に見えるような気がする。

会の運営の中枢は、なんといってもこの機関誌「日本の石仏」にあると思っている。年々歳々驚くべき勢いで増えてきた「石仏人口」は、それぞれが個人個人の模索であって、誰もが一番欲しいと思っていたことは情報の交換であった。石仏研究が盛んになったとはいえ、どこにどんな石仏があり、どこにどんな人々があり、それぞれの人々が何を志し、どんな方法で研究の道をたどりつつあるか、それは人づてに耳から聴く情報の範囲を出なかった。勿論僅かの人ながら早くからこの道に志した先学があり、「史迹と美術研究会」のように、関西を中心として磨崖仏や独立石仏・塔の研究においては長い間に立派な業績をのこされている会もある。戦後になってから東京に根拠をおく「庚申懇話会」もまたこの分野についてはすばらしい業績を続けられている。

けれども戦後、しかもこの十数年におびただしいまでに石仏に関心を持つ人々が現われたが、その大方の人々の志向は古い石仏・石造塔に関する専門的な研究より以上に、日本各地にどこにでもある近世以降の造立になる道祖神や庚申をはじめ、観音や地蔵その他ありとあらゆる石仏についての関心であった。道祖神だけに、あるいは庚申塔だけに対象をしぼっている人々もすくなくはないが、より多くの人々は野天に佇立するあらゆる石像・石造塔への関心であり、僅かの余暇をさいて趣味としてこれに心をひかれる人々であった。

「日本石仏の会」の目指すところもそこにあった。一人でも多くの人がこれに関心を寄せることによって、無関心からくる廃棄や、開発の波に犠牲になりつつある先人の貴重な信仰遺物を――遺物でなく信仰の生きている石仏も多い――後世に伝えることこそ、この会の究極の目的であると思っているのである。

石仏に関する信仰の民俗学的解明や、美術史的考察は誰もが目指すところであるが、この会は決して専門家の集団ではない。また今の時勢は僅かの専門家によって動いていくものでもない。会を活かすも殺すも、それは会員一人一人の努力をおいてほかにはない。会を活かす最大の道は、会員一人一人が極力原稿を寄せ合うことに尽きる。一人の卓越した意見も勿論貴重であるが、会員総べてが何に関心を持ち何を思っているか。それを誌上を通じて充分に開陳し合うことによって、石仏研究の将来もおのずから方向がきまってくるものと思う。すぐれた聖僧の説法も大切であるが、百人が千人が、何万何十万の人々が、声を合わせて称名することの功徳もまた決してそれに劣るものではないのである。

寄稿の要項は巻末に記してあるが、それはあくまで一つの基準であってそれにこだわるものではない。一枚の写真、数行の文字でも、会員一人一人が心にとめたものは、労をいとわず是非送って欲しいものである。〆切の期限は設けないこ

とにし、随時集まった原稿・写真から、年四回発刊の時期がきたらば地域性・種別性・内容性等を勘案して、編集委員会の手で体裁づくりをしていくつもりである。

現在のところ、お陰様でバラエテイに富んだ原稿を会員各位より送っていただいて編集員一同大いに気をよくしているところである。あまりにも執筆者が固定することは歓迎されないがまだ歩みだしたばかりであってその心配は不必要である。前号によい原稿をいただいたので次号にも是非と思っていても、同一執筆者が回を重ねてはとのご配慮からか、それきりになってしまうことが多い。

それとともに会員の一人でも多くの人からの原稿を載せたいというのが編集員の期待であるが、書きなれないし、気はずかしいからといって、書けるはずだと思った方も遠慮していてくださらない。不馴れの方も多いかと思うが、書いてみて、発表してみてはじめて自信がつき、また人の原稿もよく理解できるものである。どうぞ気兼ねなくどしどしと寄稿していただきたいものである。

新しい、しかも一つの学問として成長していない石仏研究の世界である。誰もが、解しえない数多くの疑問を持っている。疑問を疑問として誌上に発表し合い、会員みんなの力でその一つ一つを解明していきたい。問題の提出こそ最も期待するところである。

昭和五十二年五月

3号（1977.9）

巻頭言

理事　芦田英一

大護会長は去る七月、白内障の手術を受けられたが、その後順調な経過を辿って現在は全く快復され、秋からの活躍が約束されることになった。御同慶の至りである。

「日本の石仏」第三号をみて、まず感じたのは、本誌の内容が号を追うて充実してきたことである。会員各位から寄せられた原稿が何れも優れたものばかりだから、当然といえば当然だが、これによって今後も、益々良い原稿が寄せられることが期待され、まことに心強いことである。

そこで更に望みたいのは、このような原稿を、ある程度の数だけ手持ちがほしいと思う。今寄せられているような、バラエテイに富んだ原稿を、各種毎に幾つかずつ、いつも編集部で持っていることができたら、ほんとうに有難いと思う。そうなることによって常に余裕のある編集計画が可能となり、執筆者が固定することもなく、いつも内容の安定した「日本の石仏」ができ上ってゆくのである。

要はとにかく、執筆者の層の厚みがほしい現在である。更めて会員各位のより活潑なる寄稿を切にお願いする次第である。

次にもう一つ希望することは、本誌第二号から設けた「会員のページ」欄を、極力利用してほしいことである。会員の声——石仏に関する限りのあらゆる質問、照会、希望、感想、意見、苦情等、何でもいい、気軽に寄せてほしい。殊に会員の身近かにある石仏の紹介、或は民俗行事の信仰形態についてのリポートなどは大いに歓迎したい。身近にあるものは、いつも見馴れているために、とかく感興が湧かないものであるが、他の地域の人にとっては大変珍らしいものもある筈で、会員各位の情報の提供によって、全国に跨がる会員の理解と親近感を深めるために役立つばかりでなく、ひいては、日本石仏協会の基盤をも確固たらしめるよすがともなるのである。

些細な情報でも、思いもよらぬ名品発見のキッカケにならないものでもないし、隠れた石仏群開発の端緒となる場合だってあり得るのである。私の乏しい経験においても、何気ない世間話の中にひそんでいたヒントから、或は民族書のさり気ない記述の中から、かつては秘境といわれた地域のそれまでは土地の人以外の眼にふれたことのなかった道祖神を次々と発見し、併せて調査することができた例が一再ならずあったことを思うと、短い言葉や文字が、時には、大きな成果への誘ないになり得ることはたしかである。

そのような期待は別としても、とにかく「会員のページ」を大いに利用してほしいと思う。

今回「巻頭言」の担当が、突如私のところへ廻ってきたため、急いで書いたまではよかったが、結局は会長がすべて述べた一部分を、なぞっただけに終ってしまった。乞諒恕。

4号(1977.12)

巻頭言

理事　宇野沢 梅吉

日本石仏協会機関誌第四号を順調に皆様のお手元にお送りできることは、わが子の逞しい発育をみるようで誠に喜ばしい第一年でした。

とにかくこのような機関誌に世間では三号紙で終らねばよいがと、不安の言葉を下さるものがありますが、大護会長をはじめ、研究熱心な役員の方々、そして木耳社という強固な出版社の皆さん方が、わが事として互の心を開き合い、会の運営から出版、そして将来の展望に立って進めて下さっている本会には全く何の不安も感じられません。

当協会は昨年八月二十三日各地域の同好有志、研究者を糾合して発起人会を開き、続いて度々の役員会をもって、活動計画、機関誌の執筆分担、会員の募集等々諸般の準備をつくして本年一月に発足、季刊第一号を二月末に刊行して以来、毎号公刊毎に会員の急速な増加をみて今日、七百二十九名にまで達したところであります。

もちろん、第五号（第二年次）では是非協会員一千名をもって、全会員および同好者の充実した研究、発表、記録へと広く発展の道を拓いて『日本の石仏』の秘められた心を、正しく私達の目で見、単なる鑑賞の域を脱したいものであります。

とは申せ、かくのごとき理想や希望が努力なくして一朝になせるとは考えられません。路傍の石仏一つ一つに、過去の

世代の人々の多くの願いと結集の力が托されて、永遠に生きる希望を、私達へ残してくれるものであるとするならば、石仏が苔むし風化し路傍に吹き散る土砂と化すまで、心ある多くの人々に引き継ぐ長い年月に向かって、私たちも困難な道を避けて通るわけにはゆかないと思って居ります。

十年、二十年と長い年月の研究と、各地への行脚を積み重ねて居られる先輩や諸先生方の前で、今更に私がこんな口幅ったい巻頭言を書くのも気恥しい思いですが、昨年まで独り歩きの張り合いのない石仏石神の野良犬的研究行脚をしながら、情報、知識、そして友を求めて居たものでしたから、先輩、先生の呼び掛けにともかくもと飛び込んだ次第で、発起人会から理事会へと押し流されたようなわけです。満足なお手伝いも出来ないが、皆さんとこの道を歩くことを生き甲斐として、数年の余生を永遠と感じる喜びを味っております。

この会の会員分布と年齢配分表を見ますと、地域は日本全国に、そして性別なく青年から老人までと、その幅広さに驚きました。その点では心強く、求めるものが私ひとりではなかったと、おそまきながら悔なき反省をしております。これというのも独り好古趣味的な殻の中に閉じ籠る弊害から脱して、友のいる広場へ出てみること、語ること、歩くこと、聞くことが、私の人間回復に開眼の勇気をもたらした証左となったと思っております。

この第四号を手にして、再度第一号から内容を読み直して見たとき、多くの研究調査報告、意見全般にわたって、百花繚乱の感があります。下草の中からなお新しい研究の芽が伸びようとしています。はなやかな陰にまた別な花が見えているようです。第二年へ歳を越してそれぞれが実を結ぶような期待が湧いて来ました。この結実を待って現状に安堵しているのではなく、もっと大きい広場を、山野を求めること、即ち千名を超す広い層の会員を全国に求めなければなりません。

各地域毎に、それぞれの会員の周辺にはきっとまだ多くの求める人、語り合う知友が居られるはずです。そうした方々の研究、知識、情報交換の場として、現在七百余名の会員諸賢に体験を語って頂き、また機関誌を通じてこの「日本石仏協会」を大樹となし、大地に不動の根を拡げたいものだと考えております。

5号(1978.3)

巻頭言

会長　大護八郎

『日本の石仏』第五号を庚申塔の特集としたが、石神・石仏の中で最も多くの人々が関心を持っているのが庚申塔と道祖神である。前者については「庚申懇話会」が既に十数年にわたりすばらしい業績を遺しており、後者については専門の広域の研究会は無いが、石神・石仏の刊行物の中で最高の数を示している。よってこの両者については研究も微に入り細にわたり論考がなされているが、それでいてなお実に多くの未解決の問題を残している。

ある人々は、自分は単に石仏が好きでそれを見ることが楽しいだけであり、あるいは写真の素材としているだけで研究が目的ではないという。しかし単に好きだから、写真の素材だからといっても、数を重ねているうちにはいろいろの疑問が生れ、その意味するところを知りたくなってくるのが人情であろう。また今は調査が目的であり、めんどうくさい研究はご免だともいう。第一そんなアカデミックなことはわれわれの性に合わないという。そうかと思うと紀行や調査報告に終始している機関誌では意味が無いとのご意見もある。

けれどもいわゆるアカデミックとはどういうことなのか、庚申塔一つを例にとってみても、全国的にどのような分布を見、また地域的な様式や信仰内容の特色はどう位置づけられるか、中世後期から近世初頭の庚申供養塔の仏像中心の主尊から、寛文前後の急速な青面金剛への転回は、地域的に、統計的にどのようにたどりうるか、あるいは日月・瑞雲・邪鬼

・鶏・猿が何故に不可欠のものの如くに現われてくるのかといったところで、全国的な資料で適確にこれに答えうる人は果たしているであろうか。実態調査の不充分さを掩いかくして、いたずらに高踏的な論を展開しても、それは空中楼閣のそしりを免れまいし、それをもってアカデミックと称するならばまさに噴飯ものである。

そうかといって石仏の調査・研究の歴史の極めて浅い今日、全国的に数十万基に上る民間信仰の石仏調査は、一生を費しても個人調査は九牛の一毛にも及ばないし、居ながらにして手になしうる調査結果は出ていないのである。柳田国男が日本の民俗学の確立に当って実地調査を重視し、その上に立って帰納的に考察を進めていった道は、石仏研究にとっても常道であろう。柳田国男の学問をもって、いわゆるアカデミックと考える人は無いであろうが、それがすばらしい学問であることは申すまでもない。

しかしそのことは実態調査がすべてであることを意味しない。調査はあくまで調査であって、その結果をどう意味づけ、どう解釈していくかということがより大事であり、それなしには折角の調査も身についたものにはなり得ない。そのためにはただ無造作に数を重ねていくだけでなく、あらかじめその調査から何を導き出そうとするかの用意がなければならない。仮に調査の目的が確立し得ない場合も、それらの事実が何を語っているかといった省察を忘れるわけにはいかない。時には仮説を立てて、それを証拠だて、あるいは反証することも必要である。

要は心に期するところがありさえすれば、どんなさ細な他人の調査報告であっても、それが意味を持って自分の勉強に位置づけられるということであって、単なる石仏旅行の紀行文、報告書でも、貴重な資料たりうるということである。調査報告であり、石仏旅行の紀行文であり、石仏に関する随筆にすぎないから、アカデミックな研究をする者にとっては意味の乏しいものと考える人があるならば、それは自らの学問的態度の貧しさを暴露することにほかならない。

石仏に立ち向う凡ゆる姿勢の人々の集りであることを前提としてはじまったのが「日本石仏協会」であってみれば、日本の石仏の内容のすべてが自分の体質に合ったものばかりというわけにはいかない。リンゴの落ちるのを見て万有引力の

法則を発見したニュートンの例にも見られるとおり、要は自分の「構え」一つである。「構え」といっても一朝一夕に成るものではない。「構えようとする構え」なしには永久に構えは定まらず、構えようとする心さえあれば、数を重ねていくうちに自然と構えはできるものである。

近頃中世や近世の文献史学者、社会学者その他、在来見られた石仏研究者以外の人々が、案外石仏に関心を持ち出した徴候が見える。また道教や仏教の研究者と、民俗学的視点の上に立った石仏研究者との、立場の相違からくる論争が盛んになりつつある。果ては悪口雑言に近い言葉までも飛び出して、心ある人々の顰蹙をかっている。

自分の研究上の立場や趣味・嗜好に忠実であることは結構であるが、何も反対の立場の人々を、目くじらをたてて罵しることもなかろうと思う。そんな暇があるなら、もうちょっと反対側の人々の著述をゆっくり読み直して、頭を冷やすのがよいのではなかろうか。

それはさておき、いろいろと立場を異にする人々の意見があって、はじめて平衡感覚をとり戻し独善から脱け出すことができることは申すまでもない。どれを採りどれを捨てるかは、読者自身が最もよく知っているものである。